

医療情報部

1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

部長（教授） 小西 宏明
 副部長（教授） 佐田 尚宏
 看護師長 大柴 幸子
 看護主任 栗原日登美
 事務 10名

2. 診療部の特徴

電子カルテ稼働（2006年2月14日）から5年を超えた。システムの維持管理業務をこなしながら、次期システム更新への構想を検討し始めている。

3. 活動内容、実績

①データマイニング（data mining）

昨年度に引き続き病院情報システムに蓄えられたデータの活用について検討してきた。しかしながら電子カルテの素のままのデータは研究に直接利用できるものではなく、何らかの加工や追加情報入力が必要であることがわかった。そのため診療科や部署ごとに独自のデータベース作らざるを得ない状況を招いている。同じ情報の二重入力の手間や患者情報保護の観点からは、病院情報システム内部に一元的にデータ保存できることが望ましい。

②他院からの放射線画像の取り込み

昨年度のデジタル媒体による出力開始しに続いて、今年度は他院の画像取り込みも始まった。栃木県医師会が中心となって医用画像の取り扱い規約を策定しているが、ルール違反のCDも多く、一件ずつ説明して適切な運用をお願いしている。また約2割は取り込みが困難な画像が含まれている。DICOM標準規格が整えられているが、モダリティの古いものなど受け手側では解決できない問題がある。

③システムの更新

本年度はサーバ更新とともに、現場の端末の更新を行っている。今回の更新では基幹OSをwindows2000からXPへ変更した。一方端末はwindows7対応のものとしている。2世代前のOSに最新の端末という歪な構成は、予算を含めた総合的な判断ではあるが、これは特定メーカーに依存するコンピューターシステムの弊害とも言える。次期更新においてはいわゆるクラウドを導入し、少なくとも端末の種類やOSに依存しない対策を講ずる予定である。

④当直管理システム更新

医師・看護師負担軽減委員会の決定に基づき、新しい手当に対応したシステムの更新を行った。病院情報システムの導入は紙媒体時代から比較するとコンピュータースキルの習得を除いても医師の負担は増加している。今後はメディカルクラーク導入を視野に入れた改修も必要であるとする。

4. 総括

はじめてのシステム更新を迎えると、改めて病院機能がコンピュータに依存していることがわかる。これからのシステムは人間に負担を強いることなく、診療を支援するものでなければならない。そのひとつのキーワードはクラウドであろう。2017年を見据えた次期システムの構想は今から始まっている。スマートフォンなど周囲の状況を注視していく。